

カリキュラムの 授業科目数適正化のために

愛媛大学教育・学生支援機構

教育企画室

上月翔太

kozuki.shota.vc@ehime-u.ac.-jp

授業科目数の適正化

授業科目数の適正化とは

- 授業科目の種類を減らす
 - 特定の授業科目を削減する
- 卒業要件を少なくする
 - 卒業要件単位を127単位から124単位にする
- 授業科目を新設する
- 授業実施の簡素化を図る
 - 同一授業のシラバスやLMSの統一化
 - オンライン化による教室使用数の抑制
 - オンデマンド授業による時間割の柔軟化

授業科目数の適正化の背景

- 教学マネジメントの主要な論点の1つ
 - 政策的な要請
 - 中央教育審議会答申では2012年から言及
- カリキュラム・オーバーロード問題
 - オーバーロード(過積載)
 - さまざまな事情から授業科目は増加しがち

授業科目数の適正化の方法

- DPとの対応による精選
- 実績による精選
- 複数科目の統合
- 重要な学習内容の必修化
- 時間区分の工夫
- 他機関や他学部授業の活用

DPとの対応による精選

- 学習目標との対応を図るのが大前提
 - カリキュラム・マップの作成
 - 説得性を高めるうえで携わる人選が重要
 - 学習目標の見直しまで要する可能性もある

実績による精選

- 学生の需要が少ない授業科目の整理
 - 過去数年の受講者数などの実績による
 - (例)○年連続で受講者数が○名以下
 - 授業実施に問題があった事例なども
- 複雑な科目群の整理
 - 科目群を整理し、授業科目を削減する

複数科目の統合

- 互いの授業科目を理解するところから
 - シラバスの読み合いなど

TTやオムニバス授業の活用

- 複数教員で1つの授業を実施
- TT（チーム・ティーチング）
 - 1つの授業に複数教員が毎回入って進める
 - それぞれ専門性をもった教員による指導
- オムニバス授業
 - 複数名の教員がそれぞれの回を個別に担当
 - テーマに沿った多彩な授業内容が提供可能
- 目標や評価方針の共有が難しい

重要な授業科目の必修化

- 重要な内容は必修科目として提供する
- 必修科目の増加→選択科目の削減
- カリキュラムの特色化・魅力化の方法

時間区分の工夫

- 開講頻度の工夫
 - クォーター制の徹底
 - クォーター内での開講科目数を半減し授業を週2回開講
 - 授業担当のないクォーターを教員ごとに設定

他機関や他学部の授業の活用

- 自大学のカリキュラムを点検する
 - 共通教育と専門教育に重複がないか？
 - 他学部等で同じ授業科目がないか？
- 学部学科を越えたカリキュラムの共通化
 - 全学共通科目の充実
 - 他学部開放科目の設定
 - 発展としての副専攻制度
- 他機関との連携
 - 単位互換制度の活用促進
 - 連携開設科目の設定

適正化の目標設定

目標設定の意義

- そもそも目標がないと適正化が進まない
 - 今まで通りを続けようとする慣性
- 目標設定が妥当であれば適正化が進む
 - 論理的に明快な目標設定
 - 関係者全体のメリットにつながる目標設定
- 目標は全体の計画や方針に位置づける
 - 確実な進捗のため
 - 全学的な方針に明記されている強み

目標数値を定めるために

- 授業科目数が「多い」とは？
 - 何かの観点がないと多寡は判断できない
 - (例)「**学生数に対して**科目数が多すぎる」
- 目標数値を定める観点
 - 教育活動の資源
 - 学生の履修状況
 - カリキュラムの方針

教育活動の資源

- 教員数
 - 専任教員数や非常勤講師数
- 教室数
 - 講義室、アクティブラーニング型教室など
- 授業実施のための財政
 - 人件費
 - 教育活動に充てられる各種予算

学生の履修状況

- 学生数
 - 学部、学科、専攻等さまざまな単位でみる
- 卒業要件
 - 入学から卒業までで必要となる単位数から最低限の授業科目数を算出
 - そもそも卒業要件が大きすぎる場合も
- 学生の履修実態
 - 1週間でどれだけ授業科目数があるか
 - 各学年で適切な履修が行われているか

カリキュラムの方針

- 選択の幅の設定
- 分野によって幅の設定の考え方は異なる
 - 順次性の強い分野→幅は小さくなる傾向
 - 順次性の弱い分野→ある程度幅を要する傾向

議論の前提の整理

議論の前提の整理

- 現状にいたる経緯の把握
 - なぜ、今の授業科目数なのか？
 - 改組の影響
 - カリキュラム改革＝目玉授業の増設
 - 退職教員の授業が継続されている
 - なぜか、こうなっている
- 授業科目の適正化の手続き
 - 誰が、いつまでに、どの手順で進めていくのか
 - 学内のルールの確認
- 削減してはならない授業科目
 - 資格や免許にかかわるものなど

授業科目数適正化の意義

意義をいかに説明するか？

- 伝え方で合意形成の進みやすさが変わる
 - 単なる「全体最適」「経営の理論」では通じない
 - 誰にとって
 - 学生、教員、職員、経営陣、学外者…
 - どのようなメリットがあるのか
 - よりよい教育、健全な経営
- 現在のカリキュラムの課題と紐づける
 - 「今のカリキュラムは複雑過ぎて学生も教員も理解できていないのでは」
 - 「極端に受講者数の少ない授業と多すぎる授業がある」

授業科目数適正化の意義（例）

- カリキュラムの意図をみえやすくする
 - DPとの対応、履修の過程
- 学生の学習行動に影響する
 - 適切な履修選択、学習時間の確保
- 授業の質を高めることになる
- 重要な授業に資源を割り当てる
 - 全体の授業科目を削減して、少人数ゼミを充実させるなど
- カリキュラムの運用を容易にする
- 教育以外の業務とのバランス

適正化に対する反論の例

- 「授業科目が多いことは魅力である」
- 「受講者数の少ない授業科目だからこそ学びがあるはずだ」「受講者数が少ないという理由で学生の学ぶ権利を奪うのか」
- 「〇〇学が不要だと言うのか？大学としてもっと学術を尊重する態度を示せ」
- 「学問の自由に反しているのではないか？」
- 「そもそも、あまりカリキュラム変えたくない…」

関係者にとっての意義を示す

- 授業科目数適正化の意義について、想定される関係者を挙げて、その人にとっての意義やメリットを説明してみましょう。

想定される関係者とその人に示す意義やメリット

反論を想定する

- 授業科目数適正化を提案した際に、誰からどのような反論や批判が出されるか、具体的に想定してみましょう。

想定される反論や批判

授業科目数適正化の 実践

実践の過程

- スケジュールの確定
 - 運用開始年度からの逆算
- 承認を得る過程の確認
- 他機関や他学部との調整
 - オフィシャルなものから、根回しまで
- 役割分担
 - 誰が何の作業を行うか？
 - 各専門分野に対する裁量を示す
 - 「自分たちで決めた」という意識を促す

合意形成とは

- 合意とは(猪原(2011))
 - 全員が賛成すること
 - 反対者がいなくなる
 - 反対者を少なくすること
 - 反対者を少なくするように努力すること
- 合意形成の過程に意義がある
 - 「合意形成のプロセスを実施することによって、そのプロセスを実施しない場合よりも社会的によりよい状態が出現することが重要であるという考え方」(倉阪(2012))
 - 全員の「賛成」よりも、関係者の協力関係の構築に重きをおく

猪原建弘(2011)『合意形成学』勁草書房、倉阪秀史『政策・合意形成入門』勁草書房

合意形成を進める工夫

- わかりやすく根拠を示す
 - 主観よりも客観
- 議論の前提を揃える
 - 「カリキュラムとは何か」
- カリキュラムの課題を認識させる
 - 数年先の未来予測も有効
- 目標を絶えず思い起こさせる
 - 何のための適正化なのか?は忘れられやすい
- さまざまな立場に対する共感を示す
 - 特定の立場を代表しているようには見せない
- 話をする順番や依頼の仕方に配慮する
 - 「まず執行部、それから…」
 - 「お願い」「依頼」なのか「意見交換」なのか…
- 必要に応じてハブ的な役割を引き受ける
 - さまざまな関係者を適切に仲介する
- デメリットも明示する
 - 適正化による反作用や副作用を隠さない
- 外部者の支援を受ける
 - 専門家による研修やアドバイジング

合意形成を進めるために

- 授業科目数の適正化を進めるための議論で、立場を異にする人々の合意形成を進めるためにできる工夫を具体的に挙げてみましょう。

合意形成を進める工夫

授業科目数適正化のその後

新カリキュラムの評価

- 授業科目数に注目する
 - 学生の履修状況
 - 想定した通りの履修行動になっているか
 - 重要な内容が抜け落ちてしまった
 - DPを達成しうるカリキュラムになっているか
 - 授業科目数適正化による想定外の影響
 - 重要な授業科目の履修が困難な時間割
 - 資格や免許に必要な授業科目
 - 他機関の授業科目
 - 把握の方法
 - 学生調査、履修相談や教務窓口での対応事例など

教職員の実感

- 構想と現実の違いを確かめる
 - 「業務負荷が減ると思っていたがそんなことはなかった」
 - 「重要なあの内容を学ぶ機会がまったくなくなっているようだ」
 - 「え、〇〇って～先生の授業で扱うんでしたよね？」
- 学生の学習成果を踏まえた調整の機会
 - 授業科目数を増やすという選択肢は極力回避

制度の見直し

- 授業科目数をコントロールしやすい制度
 - (例) 授業科目名を細かくし過ぎない
 - (例) カリキュラム改編の際には授業科目数のデータも参照する
- シラバス作成時に授業内容の調整を図る
 - 限られた授業科目数では特に重要
 - 他の授業科目のシラバスを参照させる工夫
 - シラバスのチェックリストの項目化
 - 「他の授業科目との関連を示している」
- 教員公募時の取り決め
 - 授業担当についてどのように提示するか

適正化のその後

- 適正化したカリキュラムが運用されて以降に、行うべきことや配慮すべきことには何があるでしょうか。できる限り挙げてみましょう。

適正化のその後